

夜の隙間で

風見なぎ

なんで、なんでなんでなんで。

意味のない疑問が頭の中にぐちゃぐちゃと浮かんできて、それを追い払うようにただ足を動かす。下駄特有のカラカラとした軽い音が、余計に心を荒ませる。足の親指が痛い。なんであの子。なんで今日。わたし何かしただろうか。帯がきつい。消えたい。喉が渴いた。夏の夜の湿度と人の熱気が混ざって、もやもやとまとわりつくような空気から逃げるように、ひたすら歩いた。

——ふと、久しく聞いていない声を思い出して、立ち止まる。あの人は今、どこにいるだろうか。もしかしたら私からの電話を待っているかもしれない、なんて傲慢なことを思いながら、電話帳アプリを開いた。

《土曜日、行けなくなっちゃった ホントごめん》

外せない仕事が入ってしまったと、彼からそうメッセージが来たのは水曜の夕方だった。前々から行こうと言っていた花火大会。もともと行きたいと言いだしたのは彼だったし、人混みが苦手で正直あまり乗り気ではなかったもので、特に残念だとも悲しいとも思わなかった。《そっか、じゃあまた来年だね》と返して、既読だけが付いたメッセージの画面を閉じた。

土曜日、つまり今日の夕方——つい数時間前だ、たまには悪くなくかもしれない、そう思っただけ、いつか着ようと買ってからそのままだった、セパレートタイプの簡単に着られる浴衣をクローゼットから引っ張り出した。かつて京都旅行の記念に友人とお揃いで買った簪で、セミロングの髪をまとめた。和装が引き立つように、メイクはナチュラルめに。……意外とかわいいじゃん、と、姿見に映った自分を少しだけ褒めてあげると、目と鼻の奥に少しだけ何かがこみ上げる感覚がして、すぐに飲み込んだ。今は、今日だけは、かわいい私でいられる。と、思っただけなのに。

「なんで……？」

絞り出したようなかすれたその声、私のものだったのか、彼のものだったのかは、わからない。鳥居を挟んでこちら側と向こう側で、ただ立ち尽くす寂しい女一人と、彼と、その隣でハッとしたように彼の腕から手を離れた、見覚えのある女の子。一瞬の思考停止のあと、すべてを理解した頭と身体を引き返した。視界の端で、私のと色違いの髪飾りが揺れた。

「——今日、やっぱいいよ、行っても」

『え？』

「花火、始まっちゃうよ。行ってもいいよってか、もう着いてるから。早く来て」

『えっ、でも』

彼の連絡先をブロックした操作の流れのまま、彼が言い出す前から私を花火大会に誘っていた人に電話をかけた。私に彼氏ができたと知つてもなお、「やつぱり僕じゃダメ？」と、スマホの向こうで困ったようにクスクスと笑っていた声。『もしもし？』と、三コールほどで、少し高めのその人の声が耳に届いた。久しぶりに聞くその声に、再び鼻の奥がツンとした。

思えば、あの人が「行けなくなつた」ことに何とも思わなくなっていたことも、早々に他の男に縋るような私の性質も、あの人が私を手放すには十分だったのかも知れない。私ってほんと悪い女、そう心の中で自嘲したあと、どこで、も言わずに「それじゃ待ってるから」とだけ言い放つて、通話終了ボタンを押した。

ドン、と地面から身体の中を突き上げるような音がして、空を見上げる。濃紺の空をキラキラと彩る、色とりどりの光の粒。……ああ、始まつちやつたじゃん。空で散っては消えていく光をポーッと見つめているうちに、喉の奥でつかえていた涙が込み上げてきた。涙が零れないように上を向いてみるけれど、目の中で赤とピンクと白の光がにじむ。そんな私を気にかけることなく、青、緑、黄色、紫と、光の粒は私の目の中でどんどん大きくなって、散って、零れて、滲んで、溶けていく。

当然彼は私を見つけることなく、最後のひとときわ大き

い花火が上がって、光の粒が空に溶けた。ぱらぱらとした拍手のあと、名残惜しそうにゆっくり動き出す人混み。そうして初めて、こんな場所で人目もはばからず涙を流していたのだということに気がついて、慌てて目をこす。綺麗だったね、とカップルが嬉しそうに話すのがどこからか聞こえた。……あの人たちもどこかで花火を見ていたのだろうか。それとも花火が上がる前に解散したのだろうか。今となっては、そんなことはもうどうでもいいけれど。再び涙が零れそうになるのを堪えるように、帰る、と声を絞り出して、後ろを向いた。

「泣いてんの？」

視線の先で、戸惑ったような顔をしたその人が、そう訊いた。人も少なくなつた会場で、その声は私だけに届く。

「……なんで」

「なんで、って……」

来てって言ったのそつちじゃん、と、困つたように笑う彼。

「……来るの遅いから、花火終わつちやつたよ」

ごめんって、と言って彼は笑う。電話のあと家からそのまま出てきました、といったような様子で、半袖の黒いシャツを羽織つて、右手にスマホを握りしめたまま、彼は優しく微笑んだ。

「送るから、一緒に帰ろ」

近くの神社の駐車場の自販機で買った缶ジュースを二人してちびちびと飲みながら、何も言葉を交わさないまま歩く。遠くのほうで、未だ解散するのも惜しいらしい人たちの話し声がした。コンクリートの地面を歩く下駄とスニーカーの音が、交互に聞こえている。開いたプルタブの中を見つめながら、ありがと、と言おうとして口を開きかけたときだった。

「僕は、君を泣かせるようなことしないけどな」

彼は私のほうを見ずにそう言っ、また一口、みかんジュースをすすった。目はまっすぐ前を見つめたままで、缶から離れた唇はキュツと結ばれていた。

「……泣いてないし」

言おうとした四文字を飲み込んで、私も彼を見ずにそう返した。そう言うと思った、と仕方なさそうに彼が笑うのを横目に、もうほとんど中身の残っていないジュースを無理やりすすった。みかんの酸味が喉に張り付いて、せき込みそうになる。

「私のどこがいいの」

しばらく黙り込んだあと、わざとぶつきらぼうにそう訊いた。彼が悪い女に引っかけたかかってしまわないように、できれば彼が、私を嫌いになってしまおうように。

「ホントは僕のが好きなのに、意地張って好きって言わないとこ」

「……変なの」

悪あがきもむなしく、彼はそう言ってこちらを見た。好きじゃないし、とは言えるわけもなかった。意外と見る目ないんだね、と言いかけて、やめた。彼が本当に私から離れてしまうことに耐えられるほどの悪い女には、なれない。

「彼氏に捨てられた途端に他の男に電話するような女だよ」

「僕だって、好きな子が彼氏と別れた途端に言い寄るよ
うな悪い男だよ」

彼は私の顔を覗き込むようにして言った。何となく照れくさくて、視線をそらして前を見る。

「……貴方ってさ、意外とバカだよ」

「ええ？」

「なんでもない！ ほら、早く行こ」

そんなの、最初から分かっているよ。分かっているから、電話したんじゃない。

来てくれて、嬉しかったよ。

それをちゃんと伝えられるのは、「好きだよ」って、素直に言えるのは、一体いつになつてしまうんだろうか。

でも、彼が悪い男で、私が悪い女でよかった、って少
だけ思ったことは、いつまでも内緒。